シリーズ 授業と生徒を語る

「I was born」の授業　第３回〈全５回〉

渡辺　良光

「I was born」の５連・６連を再掲する。

少年の思いは飛躍しやすい。その時　僕は　＜生まれる＞ということが　まさしく＜受身＞である訳を　ふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた。
――やっぱり　I was born なんだね――
父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。
――I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね――

父は無言で暫く歩いた後　思いがけない話をした。
――蜉蝣という虫はね。生まれてから二、三日で死ぬんだそうだが　それなら一体何の為に世の中へ出てくるのかと　そんなことがひどく気になった頃があってね――
僕は父を見た。父は続けた。
――友人にその話をしたら　或日、これが蜉蝣の雌だといって拡大鏡で見せてくれた。説明によると　口は全く退化して食物を摂るに適しない。胃の腑を開いても　入っているのは空気ばかり。　みると、その通りなんだ。ところが卵だけは腹の中にぎっしり充満していて　ほっそりした胸の方にまで及んでいる。それはまるで　目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが　咽喉もとまで　こみあげているように見えるのだ。つめたい　光りの粒々だったね。私が友人の方を振り向いて＜卵＞というと彼も肯いて答えた。＜せつなげだね＞。そんなことがあってから間もなくのことだったんがよ。お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれたのは――。

発問Ⅵ　『やっぱり　I was born なんだね』の『やっぱり』を他の言葉で言い換えよ。

気の利く生徒は、辞書で調べるかもしれないが、ここも生徒自身の言葉が欲しい。「思っていたとおり」「前から何となく感じていた」などが答えられれば良いだろう。教師は、「前から」思っていたことを強調する。

確認の発問「『その時　どんな驚きで』の『その時』とはいつか？」確認する。さらに、確認の発問「『僕にとってこの事は文法上の』の『この事』が指す内容は何か？」確認する。どちらも、すぐ答えが得られよう。

補足の発問①「『父は暫く歩いた後』の『暫く』はどのくらいの時間か？」問いかける。『女はゆき過ぎた』の時間経過と、関連付けて発問する方法もあるだろう。私は、『女はゆき過ぎた』は、『少年の思いは飛躍しやすい』『ふと諒解した』『僕は興奮して』などの表現から、極めて短い時間と解釈している。それに対し、この『暫く』は、『息子』の言葉を受け止め、どのように応じたら良いかを考えている時間だと解釈している。「『女がゆき過ぎた』後、『僕』が＜生まれる＞ということが＜受け身＞であると、『ふと諒解』するより長い時間であり、『僕』の問いかけのような言葉が『消えない』ほどの時間」と考えている。

発問Ⅶ　『父は無言で暫く歩い』ていたとき、どんなことを考えていたのか？想像せよ。

補足の発問①は、なくてもいいかもしれない。

発問Ⅷ　『ひどく気になった頃』とは、いつのことか？答えよ。

この発問は、詩の最後までやり終えてからした方がいいかもしれない。答えは、「僕が生まれる少し前」であり、「僕のお母さんが死ぬ少し前」である。

確認の発問「『僕は父を見た』とあるが、何故、『見た』のか？」『思いがけない話』だったから。さらに、「どういう話だったら、思ったとおりだったのか？」と、問いを続けてもいいだろう。『僕』は、英語の『文法上の単純な発見』を」したので、褒められるまたは、同意してくれることを期待していたのではないか。

また、確認の発問「『これが蜉蝣の雌だ』と言ったのは誰か？」確認させる。『父』の『友人』が答えである。さらに、確認の発問「『説明によると』とあるが、説明しているのは誰か？また、その『説明』の部分を答えよ。」答えは、『友人』であり、『口は全く退化して食物を摂るに適しない。胃の腑を開いても、入っているのは空気ばかり。』である。

またさらに、確認の発問「『見ると、』は、誰が見ているのか？問う。答えは『父』である。またまたさらに、確認の発問「『その通り」とあるが、何の『通り』か？』問う。答えは、『説明』の『通り』である。

補足の発問①「『それはまるで』の『それ』が指すものを答えよ。」答えが、『卵』とだけ出たら、「『腹の中にぎっしり充満していて　ほっそりした胸の方にまで及んでいる』『卵』だね。」と、イメージを強める説明を加える。

発問Ⅸ　『目まぐるしく繰り返される生き死に』とは、どんなことを言っているのか？説明せよ。

なかなか答えが出ないだろう。そこで、視点を変えて補足の発問②「何が『目まぐるしく繰り返され』ているのか？と問い直す。『生き死に』と答えが出るだろう。補足の発問③「では、自分たちは、『目まぐるしく』『生き死に』を『繰り返』しているだろうか？」問いかける。多数の生徒は、否定するだろう。補足の発問④「『目まぐるしく』『生き死に』を『繰り返』しているのは何だろう？」と、問い直す。答えが出ない場合は、「『目まぐるしく』『生き死に』を『繰り返』せないって考えたよね。確かに渡辺良光という個人では、『生き死に』なんて『繰り返』せないけど、複数の人、もっとたくさんの人、日本や世界で考えたらどうだろう？」とヒントを与える。「人間全体」と答えられれば、次に「これ、蜉蝣の卵を見て言っているんだよね。」とさらにヒントを加える。「全部の蜉蝣」という答えには、またさらに、「蜉蝣だけかな？人間だけかな？」とヒントを続ける。多分「生き物全体」という答えに誘導できるだろう。

教師からの確認の発言。「『目まぐるしく繰り返される』生き物全体の『生き死にの悲しみが』・・・死ぬのが悲しいのは分かるけど、生きるのも悲しいのかな？でも、作者はそう言っているね。」

確認の発問「『つめたい　光りの粒々』は何か？」答えは、「卵」「蜉蝣の卵」である。

確認の発問「『私が友人の方を振り向いて＜卵＞という』とあるが、『私』とは誰のことか？また、何故『＜卵＞』といったのか？説明せよ。」と問う。『私』の方は、すぐ「僕の父」と答えが出そうだ。しかし、『＜卵＞』の方は、『目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが　咽喉もとまで　こみ上げているように見え』たから。」とか、『つめたい　光りの粒々』のように見えたから。」という答えが出そうだ。「興味がわいたから。」などもありえよう。それらは全て正答とし、その上で、「友人の『説明』に『＜卵＞』はあったかな？と振り返させる。蜉蝣の雌の腹の中で一番目立つはずの『腹の中にぎっしり充満していて　ほっそりした胸の方まで及んでいる』＜卵＞には触れていないことに気付かせる。

（つづく）